論　文

“被字句”の受け手と仕手との関係について

高橋弥守彦

Concerning the Relationship between the Subject and Object of the “Chinese Passive” Sentence

TAKAHASHI Yasuhiko

要旨：

据笔者（2012）调查，如以下例句所示，“被字句”的“受事者”一般为人物（例1）、组织、身体（例2）、物体、事情、空间（例3）等，“施事者”一般为人物、组织（例4）、身体、物体（例5）、事情（例6）等。

(1)　他不时被寒风呛得咳嗽着。（『講読』② p.44）
彼は寒風にむせて、ときどきせきこんでいた。（『講読』② p.50）

(2)　可是窑汉的胳膊也被撕了一条长长的血口子……（『人民』93-3-111）
だが自分の腕も、引き裂かれて大きい傷を負ったのだ。（同上）

(3)　一条小街，被古老、破旧、高高低低的矮草房挤得曲曲弯弯。（『人民』91-6-96）
その小さな通りは、古びていたみのはげしい背の低い草ぶきの家が、軒の高さを異にしてぎっしりと立ち並び、うねうねとくねっている。（同上）

(4)　儿子真是争气，以全县高考总分第三名的好成绩被上海财经大学录取。（『人民』97-10-75）
県の高考（全国大学統一入試）で三番になって上海財経大学に合格するなんて、息子のやつ、やってくれたもんだ。（『人民』97-10-74）

(5)　在大雨中，我看到萍在拉起那根黑线的时候被什么东西抛起来，而后又摔倒在地上。（『人民』96-12-85）
が、雨でずぶ濡れになった萍が電線を掴んだと見たその時、彼女の体は宙を舞い、つづいて地面に激しく叩きつけられた。（同上）

(6)　可是最近一个月，他竟被一件事情弄糊涂了。（『人民』90-10-96）
だがこの１カ月、あることで頭がおかしくなってしまった。（同上）

本文在分析由受动者和施动者所构成的这些名词之间的关系的基础上，进一步探讨笔者提出的“被字句”中“受施动者＋受动者影响的行为和感情等”这一被动义的结构。

キーワード：受身表現　受け手　仕手　格付き名詞　受身のむすびつき

目次

0. はじめに
1. 日中両言語における文の体系
2. 中国語“被字句”の受け手と仕手
3. 受け手と仕手の省略
4. おわりに

0. はじめに

中国語の受身表現は、一般に“被字句”・意味上の受身表現・語彙上の受身表現の 3 類に分類できる。この 3 類の文が受身表現と言われるのは、筆者の調査によれば、それぞれの文中にひとつの現実を言語化する受身義を表す意味構造「受け手＋仕手の影響を受ける行為や感情など」が共通して存在するからである。この意味構造の核となるのが受身義を表す「受身のむすびつき」である。

本稿では、先行研究と実例に基づき名詞を 10 類に分け、中国語受身表現“被字句”の受け手と仕手となる名詞を分類し、両者の意味関係を再検討する。

1. 日中両言語における文の体系

中国語では多くの研究者によって“被字句”・“把字句”・主述文が互換関係[1]にあるとよく指摘されている。筆者は、かつて互換関係にある各種の文を分析し、その意味関係[2]を明らかにしている。

［表 1］文レベルの体系

(7) 他喝牛奶了。（“主谓句”）
　　彼は牛乳を飲んだ。（筆者訳）

(8) 他把牛奶喝了。（“把字句”）
　　彼は牛乳を飲んだ。（筆者訳）

(9) 牛奶他喝了。（“受事主体句”）
　　牛乳は彼が飲んだ。（筆者訳）

(10) 牛奶被他喝了。（“被字句”）
　　牛乳は彼に飲まれた。（筆者訳）

---

1) 人民教育出版社中学语文室（1984：19）では、‘把字句、被字句和一般的“动词＋宾语”句有时候可以互相变换：小孩把玻璃杯摔破了。玻璃杯被小孩摔破了。小孩摔破了玻璃杯。’と説明し、基本的な文意の同じ互換可能な文が 3 例挙げられている。吕文华（2008：279）では、“被字句”と主述文との互換関係を 3 類に分けて、詳細な分析を行っている。房玉清（2008：215 ～ 219）では、3 類の文の互換できる場合とできない場合を挙げ、その理由も言語事実に基づいて詳細に解説している。現段階の文法書としては一番詳しいであろう。輿水優・島田亜実（2009：99）では、基本的な文意が同じ“被字句”と“把字句”の互換できる場合を挙げ、言語事実からの説明をしている。丸尾誠（2010：152）でも“被字句”と“把字句”の互換できる場合と共通点を挙げている。

2) 高橋弥守彦（2014：125）では［表 1］と［表 2］を挙げ、文の互換関係を説明している。

(11) 母亲让他喝了牛奶。(“使令句”)

母親は彼に牛乳を飲ませた。(筆者訳)

[表 2] 一つの現実を表す文の体系（現実の世界：意味構造）

一つの現実 / 言葉の世界	主体 ＋ 出来事	
主述文：	仕手	仕手の行為や感情など（例 7）
“把”字構文：	仕手	処置などによる対象の強調（例 8）
受事主体文：	受け手	受け手の強調を表す仕手の行為や感情など（例 9）
受身表現：	受け手	仕手の影響を受ける行為や感情など（例 10）
使役表現：	仕手	仕手の影響による受け手の行為や感情など（例 11）

言葉はヒトを介して現実を反映する[3]。両者の関係は「はじめに現実ありき」である。そのため、現代の各言語は高度に発達し体系化されているものの、現実が徐々に変化するので、それに対応する必要から、単語も増え構造も新しく生まれ、言語の体系も豊かになってくる。どの言語であれ、言語は社会の変化とともに変化する。この点は上記の［表 1］［表 2］にみられるように、すでに体系化されている中国語も例外ではない。たとえば、中国語では、文化大革命時代の刑罰の一つ“坐飞机”がすでに死語となり、近年では“被留学”などが新しく誕生している。

上掲の文（例 7 ～ 11）も現実を反映し、主体と客体との関係によって、一つの現実を異なる種類の文で表現している。上掲の文は、それぞれ主体と客体との関係が異なるものの、言語の体系から見れば、同一の現実を異なる種類の文で表現しているので、一つの文体系と見なしてよいだろう。

これとは別に、“被字句”は受身義を表すが、受け手主体と仕手客体には、どのような名詞が使われ、両者はどのような関係にあるのだろうか。筆者の調査（2012）[4] に基づいて、筆者は日中両言語の名詞を以下のように分類[5] する。筆者の調査によれば、「受け手」と「仕手」にはよくヒト・組織・カラダ・モノ・コトなどが用いられているが、空間や時間はほとんど用いられていない。なぜこのような特徴が現れるのであろうか。

[表 3] 名詞の分類

名詞 ┬ 生命体：ヒト（動物も含む）、カラダ、植物（全体・部分）、組織
　　└ 非生命体：モノ、コト、心力（理性・感情・感覚など）、自然力（水・火・風・雷・音など）、空間、時間

3) 高橋弥守彦（2010:31）では現実の世界と言葉の世界の関係をヒトの認識と思考により体系的に図式化している。
4) 本表は、高橋弥守彦（2012a：153）の名詞の分類表を修正したものである。
5) 李金莲（2012:75 ～ 78）は名詞を“有生命”4 類（“人:他, 乡亲们”“动物:鸡, 鲨鱼”“身体:脚, 手掌”“集体:政府, 学校”）と“无生命”3 類（“自然力：风, 洪水”“具体事物：书, 绳子”“抽象事物：困惑, 友谊”）の 7 類に分け具体的な名称も挙げている。

日本語では以下の各種類の文に見られるように、一つの現実は主体と客体との関係により、連語レベルと文レベルの表現が異なるだけではなく、単語レベル[6]でも動詞の形態変化を見ると、他動詞から自動詞までのヴォイスの体系[7]を捉えることができる。

［表 4］ヴォイス・連語・文レベルの各体系で作る文

（12）次郎は汚水を（川に）流した。（他動詞、能動文）

（13）汚水は次郎によって（川に）流された。（受動態、受身文）

（14）太郎は次郎に汚水を（川に）流させた。（使役態、使役文）

（15）次郎は太郎に汚水を（川に）流させられた。（使役受動態、使役受動態文）

（16）汚水が（川に）流れた。（自動詞、能動文）

［表 5］一つの現実を表す文の体系（現実の世界：意味構造）

一つの現実 ＼ 言葉の世界	主体　＋　出来事	
能動文（他動詞）：	仕手	仕手の行為や感情など（例 12）
受身文：	受け手	仕手の影響を受ける行為や感情など（例 13）
使役文：	仕手	仕手の影響による受け手の行為や感情など（例 14）
使役受動文：	仕手	受け手の影響を受ける仕手の行為や感情など（例 15）
能動文（自動詞）：	仕手	仕手（モノ）の動き（例 16）

日中両言語の受身表現はヴォイスの体系の有無により、単語レベルの比較は難しいが、連語レベル[8]と文レベルの比較であればできそうである。

2. 中国語“被字句”の受け手と仕手

筆者は中国語を単形体文字からなる形態変化の乏しい言語、日本語を多形体文字からなる形態変化に富む言語として捉えている。言語類型論によれば、中国語は孤立語、日本語は膠着語である。どの言語であれ、意思を伝えるためには、名詞・動詞・形容詞が重要な品詞である。これらの品詞を用いた各述語文のあることが、その傍証となるであろう。筆者はこれらの品詞を対象として文を 3 段階に分ける三段階言語類型論[9]を提唱している。また、日本語は原則として、名詞には格があり、

---

6) 鈴木康之（2000：45）では、他動詞のヴォイスの体系により、以下の文を作っている。本例文はそれに基づいて作例したものである。なお、鈴木はヴォイスの体系は人間関係を表すことが基本であるとしている。
　太郎が次郎をなぐった。　　次郎が太郎になぐられた。
　三郎が太郎に次郎をなぐらせた。　太郎が三郎に次郎をなぐらせられた。

7) 鈴木康之（2014）では、他動詞から自動詞までのヴォイスの体系だけでなく、［汚水の流れが（川に）現れた。］の類の文を挙げ、動詞［流す／流れる］から名詞［流れ］への転成も可能であるとしている。

8) 高橋弥守彦（2013b：74 ～ 78）では連語レベルで作る共通のむすびつきを挙げている。

9) 高橋弥守彦（2010：40）では、言語類型論は名詞と他動詞が対象だが、どの言語でも名詞・動詞・形容詞が文中では重要な意味を表すので、これらの 3 品詞を対象にして 3 段階に分ける三段階言語類型論を提唱している。

動詞には五段活用、形容詞には三段活用のあることから、日本語のなかの主要な三品詞には、多少の差こそあれ、形態変化[10]のあることが認められる。

以下では、中国語の受身表現の受け手と仕手とで作る筆者の分析した意味構造[11]「受け手＋仕手の影響を受ける行為や感情など」を再検討し、それに対応する日本語表現と名詞の格について分析してみよう。名詞は［表3］の分類に倣い、受け手名詞の各項目を中心として、受け手の項目ごとに仕手も立てて両者の意味関係を再検討する。

筆者の調査（言語資料1, 2）によれば、今回、調査した受身表現“被字句”の受け手と仕手となる名詞を生命体としてのヒト（動物を含む）、カラダ、植物（全体・部分）、組織からなる4項目と非生命体としてのモノ、コト、心力（理性・感情・感覚など）、自然力（水・火・風・雷・音など）、空間、時間からなる6項目に分類し、調査したところ、各項目に用いられていた数量は、以下のとおりであった。なお、対象となる受け手と仕手がない場合は「無」としている。

［表6］受身表現“被字句”の受け手（左）と仕手（右）

ヒ　ト(26)：ヒト（12）　カラダ（1）　モノ（2）　コト（5）　心力（2）　自然力（4）
カラダ(13)：ヒト（1）　カラダ（1）　モノ（3）　心力（1）　自然力（1）　無（6）
組　織（3）：無（3）
モ　ノ(13)：カラダ（1）　モノ（2）　自然力（3）　無（7）
コ　ト(10)：ヒト（7）　組織（1）　コト（1）　無（1）
心　力（3）：ヒト（1）　無（2）
自然力（2）：自然力（2）
空　間（5）：ヒト（2）　モノ（1）　自然力（1）　無（1）
無　(39)：ヒト(21)　カラダ(1)　植物(1)　組織(3)　モノ(1)　コト(1)　自然力(2)　無(9)

2. 1　ヒトとヒトなどとの意味関係

言葉はヒトが創造したものである。そのため、言葉はどの言語であれ、ヒトが中心である。中国語の受身表現の受け手と仕手も、以下の実例に見られるように、両者はヒトである場合が圧倒的に多い。なお、筆者は受身文における受身義を表す出来事の核として「受身のむすびつき」[12]を設ける。

(17) 他恍然大悟：他和她被介绍人拉到一起，绝非巧合，而是痴情的姑娘长期“蓄谋”的结果。（『講読』②p.121）

彼ははっと気がついた。彼と彼女が紹介者によってひきあわされたのは、決して偶然では

[10] 高橋弥守彦（2010:40）の三段階言語類型論では、世界の言語を系統的に体系化している。これはグリーンバーグ（1963）が言語事実から世界の言語を六類に分ける結果と一致している。
[11] 益岡隆志（1991）では、「機縁受動文」に対し、筆者と異なる観点を明示している。
[12] 高橋弥守彦（2012b：154～155）では、受身表現の出来事の核として「受身のむすびつき」を設けると、語順の分析に有効である、と指摘している。たとえば、例（19）では受け手主体“我们”と受身のむすびつき“生活的烟尘所吞噬”との間に“永远也不要”などの語句があるが、なぜそれらが両者の間にあるのかについて説明し易くなる。例（21）も両者の間に副詞“完全”があるが、基本的には例（19）と同様である。

なく、恋に落ちた娘が長いあいだ秘めていた「はかりごと」の結果だったのだ。（『講読』②p.125）

(18) 我听到乘务员那尖细的声音："慢点慢点。"我被一只手拉到了车上，我把竹竿揽到怀中，伸手摸索到了头顶上的吊栏。这时我听到一个女孩子的甜甜的声音，……（『人民』96-12-85）
バスが着いて、車掌が「気をつけて」と甲高い声で叫ぶと、誰かが僕をバスの中に引っ張りあげてくれた。そして、中に入った僕が、杖を抱いてふらふらしながら吊り革を探していると、優しい女の子の声がした。……（同上）

(19) 我们永远也不要被生活的烟尘所吞噬，不要丢弃支撑人生奋发的扛竿，要像化学分子中的自由元素一样……（『講読』④p.63）
われわれは、永遠に生活の中に飛び交うちりに呑み込まれてはならない。人生に向かって奮起するのに必要なてこを捨ててはならない。化学分子の中にある自由元素のようにならねばならない……（『講読』④p.69）

(20) 老婆被小江的盘算说服了。（『人民』95-7-99）
細君は江くんの計算に説得されてしまった。（『人民』95-7-98）

(21) 他弄不懂姑娘怎么能做到这一点，但他完全被她执著专一的感情征服了。（『講読』②p.122）
彼女がどうしてここまでやれたのか、彼には合点が行かなかったが、彼女のひたむきな、一途な思いにすっかり魅了されてしまった。（『講読』②p.125）

(22) 为了鸽子少一声啼哭多一个笑脸加一件新衣，他曾被雷电的金鞭抽下大海，曾被黑鲨的尾鳍砍断肋骨，……鸽子19岁了，是条美人鱼呢！（『人民』93-4-111）
鴿子の、一喜一憂、一枚の新しい衣服のために、雷に打たれて海にはねとばされたり、サメの尾ひれであばらを折ったこともあったが……もう十九になり、人魚のように美しい！（『人民』93-4-110）

本節の受け手は「ヒト」であり、仕手はヒト（例17）、カラダ（例18）、モノ（例19）、コト（例20）、心力（例21）、自然力（例22）である。仕手がヒト・カラダ・モノのいずれの場合であれ、受け手は仕手の影響を受ける対象である。たとえば、例（17）の"他和她被介绍人拉到一起"では受け手"他和她"が仕手"介绍人"にひきあわされた出来事が描写されている。受け手は仕手を中心として作る受身義の対象となっている。"被字句"は受け手がヒトの場合が多く、仕手もヒトの場合が多い。

例（18）（19）（20）（21）（22）の仕手はヒトではないが、受身義を表すための行為を表す動詞は、あたかもヒトの言動［引っ張りあげる、呑み込む、説得する、魅了する、はねとばす］のようである。ただし、例（20）（21）はヒトの関わっているコトと心力である。

2. 2　カラダとヒトなどとの意味関係

本節で言う「カラダ」は、主として具体的なカラダの全体と部分だが、抽象的なカラダの場合もある。「カラダ」はヒトの肉体的な側面なので、ヒトと深く関わる。筆者が収集した実例の中には、受け手がカラダの場合はかなりある。

(23) 汽车门刚合上，脸一下被前面那个大高个儿压着，紧紧地贴在车门玻璃上，丝毫动弹不得。(『講読』⑤p.95)

バスのドアがしまったとたん、前に立っている大男に、顔をおさえられ、バスのガラスにぴったり押えつけられた。(『講読』⑤p.107)

(24) 只觉得心被一只无形的手揪住了，直往下沉，而他不过是默默地看了她一会，便向前走去了。(『講読』⑥p.60)

ただ形のない手に心をつかまれてまっしぐらに下へ沈んでゆくように感じた。彼の方はものも言わずに彼女をちょっと見やっただけで、そのまま歩いていった。(『講読』⑥p.64)

(25) 它，只剩大半只，小手指和三分之一的手掌被冲床冲掉了十年。(『講読』③p.121～122)

それは半分ほどしか残っていなかった。小指と手のひらの三分の一はパンチ・プレスに打ち抜かれてからもう十年になる。(『講読』③p.124～125)

(26) “啪！”他的前额被什么击了一下，老伴站在跟前，用手指点着他说:“发什么疯？”(『講読』④p.100)

「パチン」馮春のおでこが誰かに叩かれた。見ると、女房が彼の前につっ立って、彼を指さして、「どっかおかしくなっちまったんじゃないのかい?」とどなっている。(『講読』④p.104)

(27) 他的心被一种难以言喻的情感罩住了，他被自己十三封信的力量所感动。(『人民』95-12-87)

彼の胸になにか熱いものがこみ上げて来たのだ。自分の手紙が彼女を救ったのだという感動で全身がふるえた。(同上)

(28) 刹时间，“皇后”的脸好像被火烤了似的，火辣辣的。(『講読』⑥p.59)

瞬間、「皇后」の顔は、火であぶられたように、ひりひりした。(『講読』⑥p.64)

本節で筆者の挙げる受け手は、具体的なカラダ（例23，25～28）と抽象的なカラダ（例24）である。仕手はカラダ（例23:“前面那个大高个儿”、24“一只无形的手”）、モノ（例25，26:“冲床、什么”）、心力（例27:“一种难以言喻的情感”）、自然力（例28:“火”）である。仕手がカラダ・モノ・自然力のいずれの場合であれ、受け手は仕手の影響を受ける対象である。たとえば、例（23）の“脸一下被前面那个大高个儿压着”では、受け手“脸”が仕手“前面那个大高个儿前面那个大高个儿”に押されている出来事が描写されている。他の実例も同様のことが言える。例(23)から(28)までの仕手はヒトではないが、仕手の行為を表す動詞は、あたかもヒトの言動［おす、つかむ、打ち抜く、叩く、こみ上げる、あぶる］のようである。

2．3　植物とヒトなどとの意味関係

筆者の今回の収集では、受け手主体が「植物」の場合は一例もなかった。これは受け手となる植物が仕手の影響を受ける現実の場面がめったにないためであろう。しかし、作例ならできる。

(29) 稻子被台风刮倒了。(作例)

稲が台風でなぎ倒された。(筆者訳)

(30) 柳枝被大风刮折了。(作例)

柳の枝が強風によって折れた。(筆者訳)

例 (29) (30) の“稻子被台风刮倒了。”“柳树被大风刮折了。”では、受け手“稻子”“柳树”は、仕手“台风”“大风”の影響によって［なぎ倒された］［折れた］のである。例 (29) (30) の仕手は自然力だが、仕手の行為はヒトの言動［なぎ倒す、折る］のようなふるまいである。

2. 4 組織とヒトなどとの意味関係

本節で言う「組織」[13]とは場所やモノではなく、ヒトの意思と係わることのできるグループである。

(31) 孙传芳自称“五省联军总司令”，他的部队就被称为“联军”。(『講読』② p.97 ～ 98)

孫伝芳は自ら「五省連合軍総司令」と称していたので、彼の部隊は「連合軍」と呼ばれていた。(『講読』② p.104)

(32) 顷刻，小村被惊动了。(『人民』91-6-96)

すぐさま、小村は驚きに包まれた。(同上)

(33) A 厂连续四年创利超百万，走在全市各厂之先，却没有被评为先进企业。(『人民』88-11-86)

A 工場は四年続けて百万元を越す利益をあげ、全市の工場のトップを走っているが、優秀企業に選ばれたことはない。(『人民』88-11-87)

本節で筆者の挙げる実例中の受け手は組織である。組織 (例 31，32，33) は個人の意思を表せないが、団体の意思は表せるので、ヒトと同様の意思を有すると看做してもよいだろう。上掲に挙げる実例中の仕手はいずれも省略されているが、受け手は仕手の影響を受ける対象であることが読み取れる。たとえば、例 (31) の‘他的部队就被称为“联军”’では、受け手“他的部队”は文中で省略されている仕手「ヒト」から［「連合軍」と呼ばれていた］のである。他の実例も同様のことが言える。例 (32) (33) の受け手は、例 (31) と同様に組織であるが、仕手はやはり省略されている。しかし、仕手の行為はヒトの言動［呼ぶ、驚きに包む、選ぶ］のようなふるまいであることから、仕手が「ヒト」であることを窺い知ることができるであろう。

2. 5 モノとヒトなどとの意味関係

本節で言う「モノ」は、主として意思のない具体的なモノである。筆者が収集した実例の中では、受け手主体がモノである場合は、そう多くあるわけではない。

(34) 雪白的帐幔被一双大手掀开，老将军敏捷地跳下床，仿佛回到了三十年代，在这个城市搞地下工作听到的警车的嚎叫。(『講読』⑥ p.40)

大きな両手で垂れ幕をあげると、老将軍はすばやくベッドから飛びおりた。ちょうど 1930 年代、この都市で地下活動に従事していたころ聞いたパトロールのサイレンに似て

[13] 以下に挙げる作例のように、一部の名詞は、動詞とのくみあわせによりモノ・場所・組織と看做せる場合がある。
他们正在盖图书馆呢。(モノ) 彼らは図書館をたてているところです。
他们在图书馆看杂志呢。(場所) 彼らは図書館で雑誌を読んでいる。
图书馆禁止聊天、吃饭。(組織) 図書館ではおしゃべりやモノを食べることを禁止している。

いたからである。(『講読』⑥ p.45)

(35) 他高大的身子像一堵墙贴在我身边，他的衣襟被车外的风扬起来擦着我的脸，这使的我心中生出几丝不快。(『人民』96-12-85)

背の高い彼がまるで衝立のように僕の傍らに立ち、そのうえ風に吹き上げられた上着の裾が顔に触れてくるのはいささか気分が悪かった。(『人民』96-12-84)

(36) 翁思茂双手颤抖，几张单据被撕得粉碎……(『講読』① p.27)

翁思茂はブルブル震える手で、その数枚の領収書をこなごなになるまでちぎった。(『講読』① p.32)

(37) 骤雨倾过来，雷电抽过来，船帆折了，桅杆也断了，一排浪奸笑着撞进了船舱，船体也被撞开了道道裂口，正往下沉。(『人民』93-4-111)

豪雨が来て、稲妻が走り、帆は裂け、帆柱も折れた。大波が白い牙をむいて船室を襲い、船体にいくつもひびが入り、いまにも沈みそうだ。(『人民』93-4-110)

本節で筆者の挙げる実例中の受け手は、具体的なモノ（例 30 ～ 33）である。仕手はカラダの一部（例 34：“一双大手”）と自然力（例 35：“车外的风”）であり、例（36）（37）の仕手は省略されている。受け手はモノなので、他の受け手と同様に仕手の影響を受ける単なる対象にしか過ぎない。たとえば、例（34）の“雪白的帐幔被一双大手掀开”では、受け手“雪白的帐幔”は仕手“一双大手”で開けられるのである。他の実例も同様のことが言える。これらの文中では、例（35）には仕手があり、例（36）（37）では仕手が省略されているものの、仕手の行為はヒトの言動［吹き上げる、ちぎる、ぶつけてあける］のようなふるまいである。

2. 6　コトとヒトなどとの意味関係

本節で言う「コト」とは、具体的なコトや抽象的なコトである。筆者が収集した実例の中で受け手主体がコトの場合は、そう多くあるわけではない。

(38) 他的名字居然会被一个素昧平生的姑娘知晓，他诚惶诚恐地点点头。(『講読』③ p.118)

なんと、彼の名は一人の見知らぬ娘に知られていたのである。彼はおずおずしながらこっくりうなずいた。(『講読』③ p.123)

(39) 自那天以后，老齐变得郁郁寡欢，仿佛自己的尊严被人扫荡干净了。(『講読』⑤ p.13)

その日から斉さんは、まるで自分の尊厳が誰かにきれいさっぱりぬぐいとられたみたいに、うつうつとして楽しまなかった。(『講読』⑤ p.18)

(40) 人生的最大价值莫过于被社会所公认。(『人民』90-5-96)

人生最大の価値、それは、社会から公認されること以上のものはない。(『人民』90-5-97)

(41) 这事被一家妇女刊物获悉，派人来给我照相，还介绍了我从一个普通男人成长为模范丈夫的光辉事迹。(『人民』90-6-98 ～ 99)

これを知った婦人雑誌が、人をよこしてオレの写真をとるやら、ふつうの男から模範的な夫になるまでの、輝かしい成長の軌跡を紹介するやら。(『人民』90-6-99)

(42) 梁公不足五十岁。他的微雕艺术在国外引起轰动，并且他的大名被收入《世界名人录》中。(『人

民』91-5-96）

彼は五十前だが、そのミニ彫刻は国外で話題をさらい、『世界名人録』に彼の名が載った。（同上）

本節で筆者の挙げる実例中の受け手は、具体的なコト（例38）と抽象的なコト（例39, 40）である。仕手はヒト（例38："一个素昧平生的姑娘"、39："人"）と組織（例40："社会"）である。本節の受け手も仕手の影響を受ける対象である。たとえば、例（38）の"他的名字居然会被一个素昧平生的姑娘知晓"では、受け手"他的名字"がすでに仕手"一个素昧平生的姑娘知晓"に知られていたのである。他の実例も同様のことが言える。例（38）（39）（40）の仕手の行為はヒトの言動［知る、ぬぐいとる、公認する］のようなふるまいである。

2. 7　心力とヒトなどとの意味関係

本節で言う「心力」とは、理性・感情・感覚などのヒトの心の働きである。筆者が収集した実例の中で、受け手が心力となっている場合は、そう多くあるわけではない。

（43）肉体又被挤压变了形，但精神没被挤瘪，反而像宇宙中的星云一样，为了新星的形成而膨胀……（『講読』⑤p.129）

体がまた押されて変形したが、精神はへこまなかった。かえって宇宙の星雲のように、新しい星を作るためにふくれあがった……（『講読』⑤p.132）

（44）有什么东西在他心底悄悄融化。他冰封经久的情感被解冻了。（『人民』93-2-111）

なにかが、彼の心の奥底をそっとやわらげて、長いあいだ氷に閉ざされていた感情をとかしていた。（『人民』93-2-110）

本節に挙げる筆者の挙げる実例中の受け手は、心力（例43："精神"、44："他冰封经久的情感"）であり、仕手はいずれも省略されている。しかし、受け手は仕手の影響を受けている対象であることは明らかである。たとえば、例（43）の"精神没被挤瘪"では、受け手"精神"は省略されている仕手によってはへこまない。例（44）も同様のことが言える。例（43）（44）は仕手が省略されているものの、仕手の行為はヒトの言動［へこむ、とかす］のようなふるまいである。

2. 8　自然力とヒトなどとの意味関係

本節で言う「自然力」とは、水・火・風・雷・音などの自然界にあるエネルギーまたはそれに準じるものである。受け手主体が自然力の場合は、そう多くあるわけではない。

（45）他浑身都落满了雪，可以看出镇定、自然的神情，却一时无法辨认面目，半截带卷的旱烟还夹在右手的中指和食指间，烟火已被飞雪打熄。（『講読』②p.46）

彼の全身には雪がかかっていて、落ち着いた、自然な表情は見て取れたが、その容貌はにわかに見分けがつかなかった。すいさしの手巻きの刻みタバコは、まだ右手の中指と人差し指のあいだにはさまれていたが、タバコの火は吹雪で消えていた。（『講読』②p.51）

（46）摇篮曲被尖利的汽车"奏鸣曲"所淹没……（『講読』⑥p.43）

子守唄が自動車の鋭い「ソナタ」に打ち消された……。（『講読』⑥p.46）

本節で筆者の挙げる実例中の受け手は、自然界のエネルギーに準じるタバコの火（例45："烟火"）

と子守唄（例46：“摇篮曲”）であり、本来の自然界に存在する自然力ではない。仕手は自然力（例45：“飞雪”）とそれに準じる自動車の出す音（例46：‘尖利的汽车“奏鸣曲”’）である。受け手は仕手の影響を受ける対象である。たとえば、例（45）の“烟火已被飞雪打熄”では、受け手“烟火”は仕手“飞雪”によって消されてしまう。例（46）も同様のことが言える。例（45）（46）の仕手の行為はヒトの言動［消える、打ち消す］のようなふるまいである。

2. 9　空間とヒトなどとの意味関係

本節で言う「空間」とは、具体的な場所や参照点の前後左右などである。筆者が収集した実例の中で受け手主体が空間である場合は、そう多くあるわけではない。

（47）从此，那条小胡同每天又被老孙头打扫得干干净净了。（『人民』88-5-91）
それからは毎日、路地は老人の手できれいに掃除されている。（同上）

（48）她睁开眼睛，周围仍被夜色笼罩着。她本能地感到时间不早了，……（『講読』④p.109）
彼女は目を大きくあけた。周囲はまだ夜のとばりに包まれてはいるが、本能的に時間が遅いことを感じた。……（『講読』④p.117）

本節に挙げる筆者の挙げる実例中の受け手は、具体的な場所（例47：“那条小胡同”）と参照点の前後左右（例48：“周围”）であり、仕手はヒト（例47：“老孙头”）と自然力（例48：“夜色”）である。受け手は仕手の影響を受ける対象である。たとえば、例（47）の“那条小胡同每天又被老孙头打扫得干干净净了”では、受け手“那条小胡同”は仕手“老孙头”によってきれいに掃除をされるのである。例（48）も同様のことが言える。例（47）（48）の仕手の行為はヒトの言動［掃除をする、包む］のようなふるまいである。

2. 10　時間とヒトなどとの意味関係

今回の収集では受け手が「時間」の場合は一例もなかった。これは受け手主体となる時間が仕手の影響を受ける場面がめったにないためであろう。しかし、作例はできる。

（49）我的时间被他占用了。（作例）
私の持ち時間は彼に使われてしまった。（筆者訳）

（50）剩下的时间被他们浪费了。（作例）
残りの時間は彼らによって台無しにされてしまった。（筆者訳）

例（49）（50）の受け手“我的时间”“剩下的时间”は仕手“他”“他们”によって［使われた］［台無しにされた］のである。動詞はやはりヒトの言動［使う、台無しにする］のようである。

3. 受け手と仕手の省略

筆者は［表3］に挙げるように受身表現の名詞を生命体4類と非生命体6類に分け、受け手主体と仕手客体に用いられている名詞がどのような名詞なのかを調査した。その結果［表6］によれば、受け手主体は文中に現れていない場合（39）が一番多く、比較的多いのはヒト（26）、カラダ（13）、モノ（13）、コト（10）などである。その他はそう多くない。仕手客体もヒトである場合が一番多く、次は文中に現れていない場合であり、あとはそう多くない。

受身表現の受け手は仕手の影響を受ける行為や感情などの対象であり、文中には受け手の意思は表れなく、仕手の意思が動詞として現れる。仕手の影響を受ける動詞は、仕手がヒトであれば、ヒトの動作や行為を表しているが、ヒト以外のモノやコトであっても、その影響を受ける動詞は、あたかもヒトの言動のようであり、受け手はやはりその対象となっている。

受身表現は仕手の影響を受ける行為や感情などを表す文（分文）なので、仕手が重要である。それにもかかわらず、[表6] によれば、受け手主体のみならず、仕手客体が省略される場合もある。ひいては両者が省略され、「“被”＋動詞」だけが省略されない場合さえある。このような言語現象を見ると、受身表現では「“被”＋動詞」が最重要であることがわかる。例文により、それらの省略がなぜ可能なのかを分析してみよう。

3. 1　受け手も仕手も文（分文）中に現れる場合

受身表現の組立構造は受け手と仕手が文（分文）に現れるのが原則である。次の2例はその原則に沿った実例である。

(51) 冷美人被男生私下里评为一号校花。(『人民』96-10-87)
男子学生たちはひそかに冷美人をミスキャンパスに推した。(『人民』96-10-86)

(52) 崔主任被这个意外情况搅得心神不宁，连文件也念不下去了。(『人民』88-10-93)
思いもかけずこんなことに気持ちを乱されて、落ち着かなくなった崔主任は、文書を読み続けることもできなくなってしまった。(同上)

例 (51) (52) は受け手“冷美人、崔主任”と仕手“男生、这个意外情况”が文（分文）中に現れている場合である。受け手と仕手のどちらが省略されても文意が曖昧になってしまうので省略できないのであろう。

3. 2　仕手だけが文（分文）中に現れる場合

下記2例は仕手だけが文（分文）中に現れ、受け手が文（分文）中に現れていない場合である。

(53) 小男孩又哭又闹，要夺回灵鳖，被娘抱住了。(『人民』94-11-101)
それを取り戻そうと泣いてあばれる息子を、母親がしっかり抱きとめた。(同上)

(54) 而他的在青海工作的孪生哥哥这几天回故乡探亲，一上街溜达却被他们瞅准。(『人民』95-3-99)
そんなとき、青海省で仕事をしている徳君の双子の兄が帰省してきて、散歩しているところを彼らに見つかってしまったのだ。(同上)

例 (53) (54) の仕手“娘、他们”は分文中に現れているが、受け手は分文中に現れていない実例である。しかし、文中には主語“小男孩、他的在青海工作的孪生哥哥”が現れ、その主語が受け手主体となる分文中では明白なので、分文中ではそれが省略されている例と言えるであろう。

3. 3　受け手だけが文（分文）中に現れる場合

下記2例は受け手だけが文中に現れ、仕手が省略されている場合である。

(55) 我被噎得说不出话来。(『講読』⑤ p.127)
私は息がつまって、ものも言えなかった。(『講読』⑤ p.131)

(56) 当日全城加肥衣服就被抢购一空。各种腰带又滞销了。(『講読』① p.49)

即日、全市の肥満型の衣類は飛ぶように売り切れ、各種ベルトは買手がなくなった。(『講読』① p.55)

例 (55) (56) の受け手“我、全城加肥衣服”は文中に現れているが、仕手が文中に現れていない実例である。しかし、受身のむすびつき“被噎得说不出话来、被抢购一空”から、仕手が［息、お客］であることは想像に難くない。これらは仕手を省略しても文意に影響がないための省略であろう。

3. 4 受け手も仕手も文（分文）中で省略される場合

受身表現にとって受け手と仕手は重要な位置を占めているが、下記2例は受け手も仕手も文（分文）中で省略されている場合である。

(57) 一旦被“整”掉，就得下基层去苦熬八个种头……(『人民』88-10-96)

いったん「粛清」があれば、出先機関に参じてつらい八時間をジッと我慢することに……(同上)

(58) 珍珍今年25岁，天生丽质，走在街上会被误认为是电影演员。(『人民』93-1-111)

珍珍は二十五歳、生まれつき美貌で、町を歩くと映画スターかと誤解される。(『人民』93-1-111)

例 (57) は文化大革命時代の現実なので、受け手は［ヒト］、仕手は［党］であることが文意から容易に理解できるので両者が省略されているのであろう。(58) は分文中では確かに受け手も仕手も省略されているが、文中での主語“珍珍”は明らかであり、それが分文中で受け手となることが文意から明らかなので省略されたのであろう。一方、珍珍を映画スターと誤解をする仕手は［ヒト］であることも明らかなので、やはり省略されたのであろう。

4. おわりに

上記の調査と分析の結果、中国語受身表現の受け手と仕手の関係は、受け手と仕手がどの種類の名詞であろうとも、受身義を表す「受け手＋仕手の影響を受ける行為や感情など」の意味構造をもち、文中には受け手の意思は表れなく、受け手は単に仕手の影響を受ける行為や感情の対象にしか過ぎない。そのため、文意はよく受け手の意思に関係のない被害義を表し易いが、受益義・中立義も表せる。

［表6］によれば、受け手主体に用いられる名詞は省略されている場合が一番多い (39) が、省略されていない名詞では、生命体がヒト (13)・カラダ (13) であり、非生命体がモノ (13)・コト (10)・空間 (5)・組織 (3)・心力 (3)・自然力 (2) であるが、作例をすれば、植物や時間も受け手主体となれる。仕手は仕手の意思や感情が文中に反映されるので、生命体のヒト (33) が一番多く、次は省略されている場合 (29) である。この2項目以外はそれほど多くはない。ちなみに生命体がカラダ (4)・植物 (1)・組織 (4) であり、非生命体がモノ (9)・コト (7)・心力 (3)・自然力 (11)・空間 (0)・時間 (0) である。

日本語のヴォイスの体系で作る文はヒトの関係を表す場合が基本なので、中国語の受身表現も筆者の収集した実例から、受け手と仕手はヒトが多いと言える。受け手は仕手の影響を受ける対象なので、どの項目もなれるが、仕手はその行為や感情が文中に反映されるので、空間や時間は仕手になりにくいと言える。また、受身表現に用いられている動詞はヒトの動作・行為でなくても、人間の言動を表しているかのようである。この点から、鈴木康之のボイスの体系で作る文は、人間関係を表すのが基本であるとする学説の正しさが証明できるであろう。

受身表現では、受け手と仕手はどちらも文中に現れるのが原則だが、どちらか一方の場合もある。ひいてはどちらも文中に現れない場合もある。受け手であれ、仕手であれ名詞は言語環境によって省略される場合とされない場合がある。どのような言語環境であれ、受身表現で省略できないのは“被”と動詞である。そうすると、受身表現で一番重要なのは受身義を表す「“被”＋動詞」であると言える。

言語資料

1. 『人民中国』ショートショート　人民中国雑誌社　1988～1996
2. 『中国語学講読シリーズ』①～⑥　柯森耀訳　北京外文出版社　1991
3. 『天声人語』集萃①②　黄力游　林翠芳 编 外语教学与研究出版社 2007　2011
4. 《新实用汉语课本》（第2版）1，2，3，4　（2010）　北京语言大学出版社
5. 《汉语系列阅读》第一册　（1998）　北京语言大学出版社
6. 《新汉语教程》Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ　（1999）　北京大学出版社
7. 『実用漢語課本1，2』（1991）東方書店『実用1，2』

参考文献

1. 王志国（1999）《现代日语实用语法教程》中国人民大学出版社
2. 王子愉 编（2005）《现代日语语法》外语教学与研究出版社
3. 王信（1998）《精修日本语文法》外文出版社
4. 王曰和（2009）《日语语法》商务印书馆
5. 金光（2012）《日语语法超简单》大连理工大学出版社
6. 屈哨兵（2008）《现代汉语被动标记研究》华中师范大学出版社
7. 邢福义（2006）《汉语被动表述问题研究新拓展》华中师范大学出版社
8. 顾明耀 主编（1997）《标准日语语法》高等教育出版社
9. 谷胜军（2007）《现代日语应用语法》北京语言大学出版社
10. 鈴木康之（2000）『日本語学の常識』海山文化研究所
11. 鈴木康之（2011）『現代日本語学の連語論』日本語文法研究会
12. 鈴木康之（2014）講義録『連語論入門』
13. 谢秀忱（1981）《现代日语语法》北京师范大学出版社

14. 战宪斌 薛豹（2008）《简明现代日本语语法》外语教学与研究出版社
15. 高橋弥守彦（2010）「中日両言語の文型『SPO』と『SOP』について」『日中言語対照研究論集』第 12 号　日中対照言語学会　白帝社
16. 高橋弥守彦（2012a）「“被字句”の受け手と仕手について」『大東文化大学紀要人文編』第 57 号　大東文化大学
17. 高橋弥守彦（ 2012b）「“被字句”の語順について」『日中言語対照研究論集』第 14 号　日中対照言語学会　白帝社
18. 高橋弥守彦（ 2013a）『中日対照言語学概論』―文法編―日本語文法研究会
19. 高橋弥守彦（2013b）「日中両言語における受身のむすびつき」『研究会報告』第 34 号　日本語文法研究会
20. 高橋弥守彦（2014）「実例から見る日本語受身文の翻訳傾向について」『中国言語文化学研究第 3 号』大東文化大学大学院外国語学研究科中国言語文化学専攻
21. 张延俊（2010）《汉语被动式历时研究》中国社会科学出版社
22. 张志军（2008）《日语自他动词》旅游教育出版社
23. 张永旺（2007）《日语被动句》旅游教育出版社
24. 趙博源（1999）『漢日比較語法』江蘇教育出版社
25. 潘钧（2010）《现代日语语言学前沿》外语教学与研究出版社
26. 彭广陆 潘钧（2007）《日语知识百题》北京大学出版社
27. 皮细庚（2007）《日语语法一点通》上海外语教育出版社
28. 皮细庚（2011）《新编日语语法教程》上海外语教育出版社
29. 杨树曾（2008）《详解使用日语语法》外语教学与研究出版社
30. 李金莲（2012）《日汉被动句对比研究》山东大学出版社
31. 李红 张瑜 段继绪（2013）《中日语态中的“责任认知”问题比较研究》南开大学出版社
32. 李培建　徐文智（2010）《新实用日语语法现象解说》外文出版社
33. 刘振泉（2003）《日语语法新编》北京大学出版社
34. 刘金钊（2000）《现代日语实用语法》大连理工大学出版社
35. 刘和民　战庆胜陈岩（1997）《例解日语语法》大连理工大学出版社

（2014 年 9 月 26 日受理）